

広島市における感染症発生動向調査結果について (2008 年)

生活科学部

はじめに

広島市では、広島市感染症発生動向調査事業実施要綱に基づき、衛生研究所に感染症情報センターを設置し、市域の感染症情報を集計、解析するとともに、その結果をホームページ等により、市民、関係機関等へ提供している。

今回、2008年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方法

1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症（エボラ出血熱等 7 疾患）、二類感染症（急性灰白髄炎等 5 疾患）、三類感染症（コレラ等 5 疾患）、四類感染症（E 型肝炎等 41 疾患）、全数把握対象の五類感染症（アメーバ赤痢等 16 疾患）および定点把握対象の五類感染症（インフルエンザ等 25 疾患）の合わせて 99 疾患とした。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位又は月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出される。各保健センターは、感染症発生動向調査システムにより患者情報を感染症情報センターへ報告し、感染症情報センターでは中央感染症情報センター（国立感染症研究所）へ全市分の患者情報を報告するとともに集計処理を行った。

なお、市内の患者定点の内訳は、インフルエンザ定点（小児科定点を含む）37、小児科定点 24、眼科定点 8、性感染症定点 9、基幹定点 7 である。

3 対象期間

全数把握対象疾患及び月報対象の定点把握対象疾患については、平成 20 年 1 月 1 日～12 月 31 日とし、週報対象の定点把握疾患は、平成 19 年 12 月 31 日～平成 20 年 12 月 28 日（2008 年第 1 週～第 52 週）とした。

結果

1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症は結核、三類感染症は腸管出血性大腸菌感染症、

四類感染症は A 型肝炎、つつが虫病、マラリア、レジオネラ症の 4 疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、梅毒、風しん、麻しんの 9 疾患で、合わせて 15 疾患であった。一類感染症については届出はなかった。2008 年における各疾患の届出数を表 1 に示した。比較的届出数の多かった疾患（結核を除く）は次のとおりである。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

38 件の届出があり、前年の 21 件から増加した。このうち 9 件が集団事例であった。月別では、8 月が 9 件と最も多く、6 月から 9 月の 4 か月間に 31 件の届出があった。血清型別では、O157 が 27 件と最も多く、次いで O26 が 8 件、O111 が 3 件であった。年齢別では、10 歳未満が 19 件と半数を占めていた。

(2) 麻しん

38 件の届出があった。月別では 3 月が 19 件、4 月が 12 件と春季が多かった。病型別では、麻しん（臨床診断例）が 17 件、麻しん（検査診断例）が 16 件、修飾麻しん（検査診断例）が 5 件であった。年齢別（5 歳間隔）では、4 歳以下が 10 件と多く、

表 1 全数把握対象疾患の届出数 (2008 年)

類型	疾患名	届出数
二類	結核	229
三類	腸管出血性大腸菌感染症	38
四類	A 型肝炎	1
	つつが虫病	5
	マラリア	1
	レジオネラ症	12
五類	アメーバ赤痢	9
	ウイルス性肝炎	6
	急性脳炎	3
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	2
	後天性免疫不全症候群	18
	梅毒	4
	風しん	7
麻しん	38	

次いで20～24歳、及び25～29歳がともに6件であった。ワクチン接種歴別では、接種歴なしが21件、接種歴不明が12件、1回接種が4件、2回接種が1件であった。

(3) 後天性免疫不全症候群

18件の届出があり、前年と同数であった。このうちエイズが6件、HIV感染者が12件であった。

性別では、すべて男性であった。年齢別では、20歳代から40歳代が多く、この年齢層が15件と83%を占めていた。感染経路は、性行為によるものが17件とほとんどを占めており、同性間が12件、異性間が5件であった。

2 定点把握対象五類感染症

(1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点及び基幹定点から毎週報告される18疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当り累積報告数は、感染性胃腸炎の430人が最も多く、続いてインフルエンザ109人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎89.2人、水痘81.0人、手足口病45.5人、突発性発疹40.2人、ヘルパンギーナ36.7人、流行性角結膜炎29.5人、RSウイルス感染症20.2人、咽頭結膜熱18.2人などとなっている。年間の推移に特長が認められたインフルエンザ、感染性胃腸炎、百日咳およびRSウイルス感染症について、広島市と全国における週別の定点当り報告数の推移を図に示した。

a インフルエンザ

年間の定点当り累積報告数は109人で、前年の261人と比べ前年比0.41と大きく減少した。2007/08シーズンは、2007年第47週に定点当り1.00人を超え、感染症発生動向調査開始以来最も早く流行期に入った。その後急増し、第51週には定点当り14.1人のピークとなったが冬休み期間中に一旦減少した。休み明けから再び増加したが、2008年第6週以降は減少傾向で推移した。4月下旬頃まで流行が続いたが、例年のような鋭いピークはみられなかった。

b 感染性胃腸炎

年間の定点当り累積報告数は430人で、前年の382人と比べ前年比1.12とやや増加した。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の55.8%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

年初から定点当り15人前後の比較的高いレベルで推移したが、3月下旬以降は減少傾向となり、

夏季は低い水準で推移した。その後、11月中旬の第46週ころから増加が始まり、年末の第52週に定点当り26.3人のピークを迎えた。

c 百日咳

年間の定点当り累積報告数は10.5人で、前年の1.14人と比べ前年比9.17と大きく増加した。

3月に入ってから急増し、5月から6月にかけてピークとなった。7月以降は減少したが、例年同時期と比べて多い状態が続いた。

以前は、乳幼児の患者が多かったが、2008年は成人の患者が多いのが特徴で、小児科定点からの報告であるにもかかわらず、66%が20歳以上の患者が占めていた。

d RSウイルス感染症

年間の定点当り累積報告数は20.2人で、前年の12.2人と比べ前年比1.66と増加した。年初から減少傾向で推移し、夏季は報告がほとんどなかった。しかし、例年より1か月程度早く10月頃から増加が始まり、第47週から第50週にかけて定点当り2人程度の多い状態が続いたが、その後減少した。

2歳以下の乳幼児が全体の82.5%を占めていた。

(2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症（性感染症定点から報告される性感染症4疾患および基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症3疾患）の報告数を表3に示した。

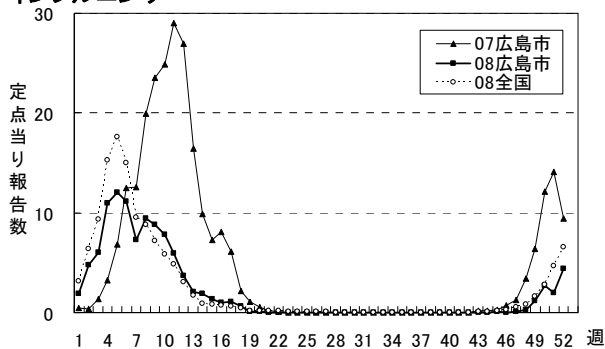
a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当り累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の34.8人で、次いで淋菌感染症の25.1人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比0.91とほぼ横ばいであった。

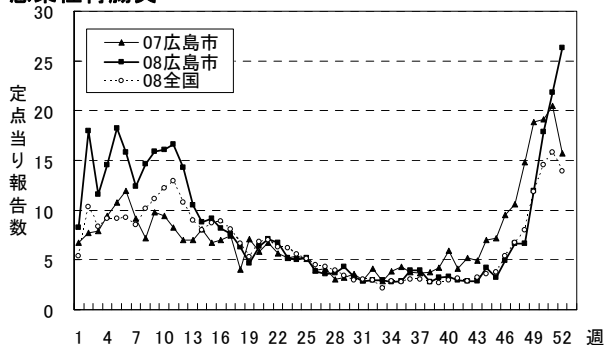
b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当り累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が71.9人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症13.6人、薬剤耐性緑膿菌感染症1.86人の順であった。薬剤耐性菌感染症3疾患の総数は、前年比1.07とほぼ横ばいであった。

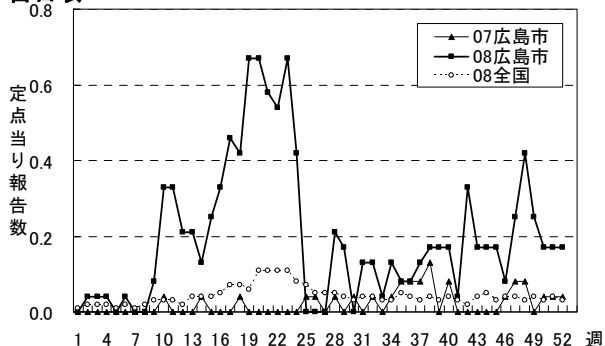
インフルエンザ



感染性胃腸炎



百日咳



RSウイルス感染症

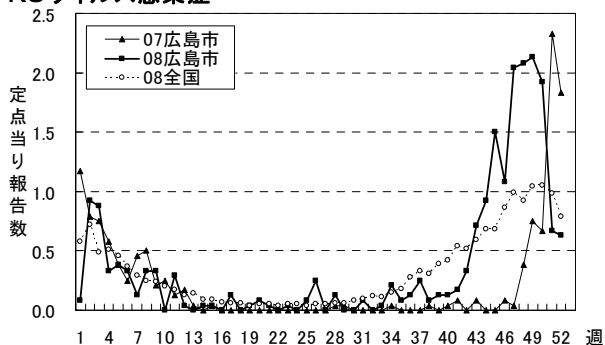


図 定点当り報告数の週別推移

表2 定点把握対象五類感染症患者報告数
(週単位報告分) (2008年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
インフルエンザ(*1)	4,028 (109)
咽頭結膜熱	433 (18.2)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2,138 (89.2)
感染性胃腸炎	10,311 (430)
水痘	1,942 (81.0)
手足口病	1,088 (45.5)
伝染性紅斑	294 (12.3)
突発性発しん	962 (40.2)
百日咳	250 (10.5)
ヘルパンギーナ	875 (36.7)
流行性耳下腺炎	153 (6.38)
RSウイルス感染症	485 (20.2)
急性出血性結膜炎	11 (1.39)
流行性角結膜炎	235 (29.5)
細菌性髄膜炎	7 (0.98)
無菌性髄膜炎	13 (1.83)
マイコプラズマ肺炎(*2)	115 (16.4)
クラミジア肺炎	1 (0.14)

(*1) 鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く

(*2) オウム病を除く

表3 定点把握対象五類感染症患者報告数
(月単位報告分) (2008年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
性器クラミジア感染症	313 (34.8)
性器ヘルペスウイルス感染症	98 (10.9)
尖圭コンジローマ	79 (8.78)
淋菌感染症	226 (25.1)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	503 (71.9)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	95 (13.6)
薬剤耐性緑膿菌感染症	13 (1.86)